

VOLUME

74

NOVEMBER

2000



# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 Japan

inside NEWS



## 第14回剣祭開催

第14回剣祭が、11月3日から11月5日までの3日間開催された。今回のテーマは「とつても14（じゅうしい）県大生」。剣祭は県立大学キャンパス近くにある草薙神社に奉納されている「草薙の剣」に由来してつけられた名称。今年度は14回目を迎え、11月3日にオープニングセレモニーが行われた。セレモニーでは、庵原小学校のオレンジマーチングクラブのパレードの後、廣部学長、西谷剣祭実行委員長の開催挨拶があり、くす玉が割られ開会が宣言された。

3日間の剣祭期間中、ミニ四駆大会、カラオケバトル、スピーチコンテスト、フリーマーケットのほか、各学部棟では文化系クラブを中心とした活動状況の掲示・発表やユニバーシティプラザでの模擬店、研究室公開等が行なわれた。

参加団体は、各クラブ・サークル、学生有志団体、フリーマーケットには地域住民も加わって各種のイベントが開催された。



オープニングセレモニー



廣部学長の挨拶



コミュニティプラザ



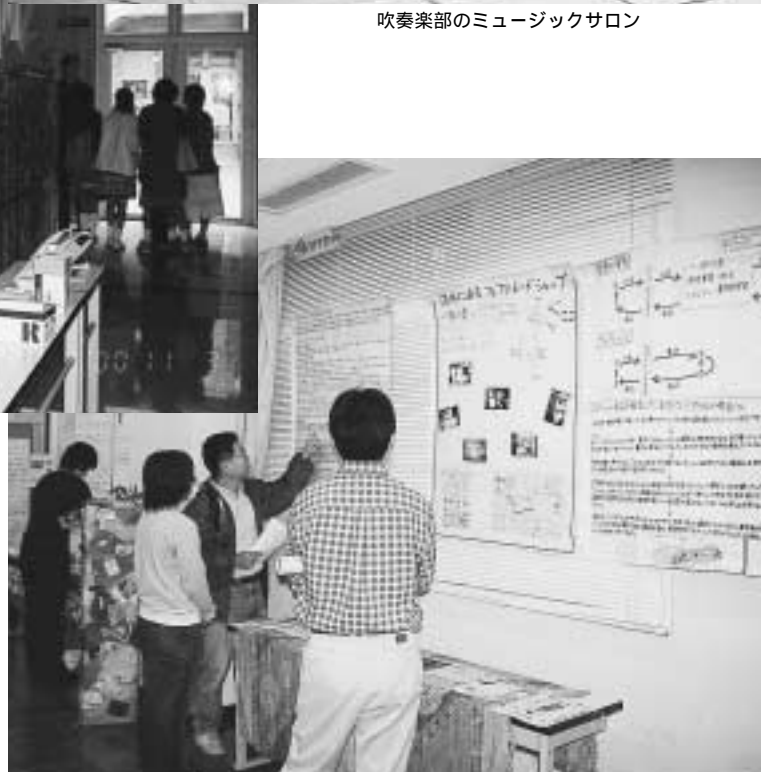
国際学会の展示



吹奏楽部のミュージックサロン



創祭実行委員会のマードーマンション



ASIA CLUBの展示

## 第4回学生文芸コンクール開催

はばたき寄金は、学生が創作活動の成果を発表できるよう第4回学生文芸コンクールを開催した。文芸部門の短編小説、短歌、俳句、詩、評論部門の指定課題、自由課題に合計67の力作が寄せられ、審査の結果、入賞者が決定した。表彰式は11月3日に開催され、廣部学長より、賞状が手渡された。

部 門	賞 区 分	作 品 題 名	氏 名 ・ 所 属
文 芸	最優秀賞	短編小説「幻想旅行記」	三田 次郎（薬学部4年）
	優 秀 賞	詩 「からっぽになったクリスティーナ」	尾崎 史江（国際関係学部4年）
		詩 「異郷人」	趙 青（国際関係学研究科2年）
		俳句 「ニュージーランドにて」	上田裕一郎（国際関係学部4年）
	佳 作	短編小説「私の喪失」	竹原 清乃（薬学部4年）
		詩 「無題」	靱矢 結子（国際関係学部4年）
		詩 「きんもくせい」	小林 桃子（国際関係学部2年）
		俳句 「アンバランス」	川瀬 真実（国際関係学部3年）
		俳句 「沙羅双樹」	志村亜矢子（国際関係学部3年）
	評 論	最優秀賞	指定課題「魅力ある大学とは」
優 秀 賞		自由課題「教育改革論議における教育現場の清浄化について」	竹原 清乃（薬学部4年）
佳 作		指定課題「魅力ある大学とは」	芹澤 徳彦（国際関係学部1年）
		指定課題「魅力ある大学とは」	藤巻 令子（国際関係学部1年）
		自由課題「豊さとは」	常賀 由子（生活健康科学研究科博士前期課程1年）
		自由課題「情報開示の社会のあり方」	山中さやか（薬学部4年）

文芸部門最優秀賞と評論部門最優秀賞を以下に掲載する。



## 学生文芸コンクール 文芸部門最優秀賞

## 短編小説 『幻想旅行記』

薬学部 4年 三田次郎

「スイッチを切られたテレビほど謙虚なものはない。」 トム ヴァーライン

## 1章 覚醒

暑い。目が覚めた。冷たいものをとりたくて、外へ出た。アパートの前に公園があり、その入り口にユリノキが等間隔に植えられている。夜中なのに蝉時雨が空気を震わしている。

部屋に戻ってから、テレビをつけた。外国のニュース、売れないお笑い芸人のトーク番組、観客が2割程しか入っていないサッカーの試合、外国のテレビ局が制作したドキュメンタリー。半裸になった褐色の男達が輪になって踊っている。猫のような顔をした西洋人の女が何か話している。

「彼らが踊らないと次の日の太陽は昇らない。そう信じている彼らは自分達を地球上で不可欠な存在だと思っているのです。」

僕はジュースを一口飲んで、テレビを消した。つまらないからすぐにテレビを消すとわかっていても、やはりなんとなくテレビをつけてしまう。すこしうんざりした。

夢を見た。どこまでつながっているかわからない不気味に長い貨物列車の貨車に乗り込んでいる。身動きできない。立錫の余地のない詰めの車内。前の人の背筋に圧迫されて、後ろへよろめく。僕の頭が後ろの人の顔にぶつかる。汗の臭いとつづやき。

「どこに向かっているのかな」

つづやきはどこから聞こえてくるのかわからない。ひどい状況なのに、あまり苦しくない。むしろ心地よくさえある。横に立っている汗だくの男も苦痛に顔を歪めながら、どこか安心したような表情が伺える。

「どこに向かっているのかな」誰も知るもんか」子供のささやき。低い透明な深い声。僕は少し不安を感じる。

翌朝起きると寝不足で頭が痛い。朝食を買いにコンビニに行く。今日僕の胃腸は少なくとも牛乳100mlと食パン2切れと白米1合半と豚肉120gと牛肉100gとトマト2個とにんじん1本とキャベツ4分の1個とオレンジジュース200mlとサイダー100mlと緑茶300ml消費するだろう。それで一体何ができるのだろう。僕はなぜ生かされているのだろう。すぐに夜が来る。

夢で感じたのと同じような感じの不安が脳天から覆い被さってきた。

それから2, 3日の間このとらえどころのない不安が発作的に襲来し、その度に子供の低い透明なささやきが脳内を稲妻のように駆け抜けた。

この不安から逃れるために、僕は旅行することにした。不安とは全く縁のない人達、自分達を地球上で不可欠な存在だと思っている人達に会ってみようと思ったのだ。

この時にはほとんど信じていなかったが、実際に不安とは全く縁のない人達は存在した。かれらは不安どころか官能、郷愁、記憶、感情からも遠

く離れていた。しかもその人達（人間といってよいかどうかわからないが）が住まう場所は地球上いたるところにあった。幸運なことに僕は彼らの秘密の一端を知ることができた。僕が体験したその奇怪な出来事を以下に記述する。

結局、この地球は穴だらけのピンポン玉なのだ。巨人がそれをもてあそぶ。

## 2章 中米某国で

図書館でアステカやインカの文化について調べものをした後、中米の小国にとんだ。植民地解放の英雄の名を冠した空港はモダンで奇麗だが、葉巻の香りと獣肉の腐敗したような匂いが空間に漂っている。インフォメーションカウンターでホテルと翌日のバスの切符を手配してもらい、市内に向かった。黄色いライトに照らされたハイウェイは所々にでこぼこがあり、タクシーはそこを通過する度に揺れた。

大きく胸をはだけた褐色の運転手は、よれよれのタバコをくわえながらハンドルを握っている。ラジオからは妙にメランコリックなギターの調べが聞こえる。黄色い光に照らされた街道沿いには崩れかかった小屋が点々としている。遠景には黒々とした低山がかすかにぼんやりしている以外真っ暗でほとんど何も見えない。

市街は喧騒で沸き返っていた。立派なコロニアル風の市庁舎と古めかしいホテルに囲まれているセントロ（中央広場）では人々が何をするというわけでもなくあちらこちらにたむろして、ビールを飲んだり、アイスクリームの屋台に群がったり、キスをしたりしていた。

濃密な空気が魚醤や肉汁や小便の匂いはらん

でむせかえるような地熱を放出している。

ここには日本にはない無秩序な楽観がある。人々は直線上を足早に歩かずに、円周上をゆっくり歩いている。彼らは恐らく自分達がどこに向かっていのかなど気にしないだろう。

僕はセントロを望むホテルの一角にあるケンタッキーフライドチキンで油でギトギトになった鶏肉を頬張った。

翌日、朝早くバスで地方の町に向かった。昨夜黒い森のように見えた低山は禿山だった。いくつもの連なる禿山。やせた土地。砂埃。この乾ききった地面はおびただしい人間の汗と涙と血を吸い取ってきたことだろう。いくつかの丘といくつかの小さな町を通過してバスは目的の町に到着した。この町のセントロの中央には鳩のフンがたくさんこびりついた小さな噴水があった。その周りをバスターミナルや宿屋、雑貨屋が軒を連ねて取り囲んでいる。人通りは少なく、パナマ帽をかぶった恰幅の良い紳士達が数人噴水の縁に腰掛けて何か話し合っているのが見えるくらいである。

僕は一番立派そうなホテルに足を運び、観光局のインフォメーションデスクを訪ねることにした。iのマークのある看板がたつてある小部屋のドアを開けて入る。5㎡くらいの部屋の奥に小さいながらも磨き上げられた大理石のデスクがあり、栗色の長い髪の女がうつむいて何かを書いている。僕がデスクに近寄ると女は顔をあげた。道具立ての大きい褐色の濃い顔。人工的な安っぽい香水の匂いが鼻を突く。僕がS族の部落に行きたい旨を伝えると女は立ちあがり奥の方に行った。黒いタイトなレザーパンツから生え出した2本の脚は氷の魔女が作った彫刻のように冷酷だ。田舎

の女子高生のまるまる太った肉付きの良い家庭的な脚とは大違いだ。女はパンフレットを持って帰ってきた。どうやらこの部落はこの辺りでは有名な観光スポットであるらしい。女は面倒くさそうに毎週でるツアーの料金や所用時間を説明する。結局、僕は町周辺の地図をもらい、部落への定期バスが出る場所を確認して、宿に帰った。

6 畳程の部屋に真ん中の少し折れたパイプベッドと洗面器、粗末な木組みの椅子が無造作においてある。顔を洗おうと白い壁に埋め込まれた洗面器の前に立つ。洗面器の上に聖フランチェスコの小さな肖像画がかかっており、ベランダから照らす夕陽がその憂鬱そうな横顔を黄金色に染めている。顔を洗い、ベランダに出る。どこからか焼いた鶏肉の香ばしい匂いが漂ってくる。先ほど歓談していたパナマ帽の男達はまだ噴水の縁に腰を落としている。豊かな頬肉にチャールズ・ブロンソンのような不敵な皺が刻まれているのが見える。

子供の笑い声が遠くから聞こえる。急に睡魔が襲ってきた。

### 3章 離脱

翌日目が覚めると頭が痛い。頭痛止めの薬を飲んでから、バスステーションに向かった。バスステーションはコンクリートを打ちっぱなしした無愛想な大きな箱で、入り口にキオスク兼案内所みたいところがある。キオスクのおばさんが暇そうに何か杏子のようなものを頬張っている。男や女や鶏や犬が所狭しとうごめいている。床には唾液やらアイスクリームの落としのやら豆のたべかすが散乱している。コンクリートの床や天井は動物達の熱気で蒸され、ルネサンスの絵画のように人間的だ。しかし夜にはこの天井も灰色の人工的

な鉱物に変わるだろう。僕は部落行きのバスに乗り込んだ。バスには僕のほかに5人が乗っている。ポプマーレーの顔写真をプリントした黒いTシャツを来た大きな身体の男、大きな風呂敷きを背負ったおばさんとその隣に座って窓にかじりついている女の子、茶色の鶏をいれた籠をかかえたおじいさん。派手な花柄のワンピースをきた若い女。

若い女はバスが出てまもなく町外れで下車した。町を出て、バスはこの辺りにしては大きな山を巻くようにして登っていく。中腹の集落で母娘がおりた。峠を越えてから、より狭くなった固い砂の道を慎重にバスは這い降りていく。振動する旧式のバス。曇天の下にひろがる黄色いやせた大地。ところどころコブのように盛り上がっている丘。ポータブルCDプレーヤーを通してイギーポップの低い声がザッパッセンジャーを歌っている。スペインの風景を浮世絵師が覗いたような感覚。バスは山をおりてしばらくしてから突然停止した。周りは何もない。100メートルほど先にペンキのはげたシェルの看板のたっている。崩れかけた無人のガソリンスタンド。

大男とじいさんは当然のようにバスをおり、バスの進行方向に向かって歩いていった。道は真っ直ぐ伸びており、その先の方は夕霧でぼんやりしている。バスの運転手がいらだたしげに叫んだ。「テルミノ！」

僕は仕方なくバスをおり、大男達が歩いていった方向に向かった。灰色の雲が大地を押しつぶすようにのしかかってくる。固い砂を踏みしめて無人のガソリンスタンドを通過した辺りから雨が落ちてきた。ガソリンスタンドのコンクリートの床は無残にうちはがされており、その上に給油ホースの残骸が死んだ巨大なミミズのようにうち捨て

られている。参ったな。僕はひとりごちてデイバックから合羽をとりだした。かがんで合羽を着ているとき、目の前の砂地が不自然に黒く陰ったので、思わず顔をあげるとさっきバスをおりたじいさんが立っている。長い間雨風にさらされてきた人間だけが許される、よくなめした皮のような褐色の肌。巨木の年輪のように深く刻み込まれた皺。深く窪んだ目は皺に閉じ込められて定かではない。鼻さえも皺の一部のように見える。じいさんの薄い唇が何かを伝えようと細かく動いたのが見えた瞬間、後頭部に鈍い重い衝撃を受け、僕は前のめりに倒れ込んだ。地面に倒れる時、わずかに目の端で黒いTシャツとポップマーレーの顔写真をとらえた。一瞬、マーレーの唇が片側つりあがったように見えた。

#### 4章 煉獄

身体がきかない。全身がしびれている。目を開けた。夜だ。星が宝石箱をひっくり返したように黒い空にちらばっている。月の周りが薄く赤色に染まっている。卵のような変な月。人の気配がする。大勢の人の。全身の力を振り絞って上半身を起こす。黒い人影が無言で輪をつくって僕を取り囲んでいる。どうやら半裸で腰布を巻いたS族の男達のような。小石の突起がジーンズの上から尻の皮膚を刺激する。急に汗が凄いい勢いで流れ出てきた。僕の上半身は裸だった。ジーンズも膝から下が切り取られている。突然、背後に強烈な力を感じて僕は立たされた。二人の男が僕の腕を締め上げている。僕は悲鳴をあげた。男の横顔はモアイ像のように無表情だ。輪の一角が崩れ、一人、こちらにゆっくり歩いてくる者がいる。乳房が三角錐形にとんがっている。女だ。目鼻立ちのはっ

きりした顔。どこかで見たことがある。腰布からつきだした冷酷な脚を見て、思い出した。観光局の事務員だ。余興にしては少し手が込みすぎている。僕は抗議しようとスペイン語の文法をくみだてようとした時、女は立ち止まって僕に宣告した。

「ペーナデムエルテ」

乾いた感情のない声。次に女は面倒くさそうになぜ僕が死刑に相当するのか説明した。いわく「醜悪な姿、無知、怠惰、傲慢」その他にも何か言っているがよくわからない。麻薬の不法所持で死刑というのは聞いたことがあるが、ぶ男だから死刑とはひどい。それにそんなに物事を知らないわけではないし、学校にも毎日行っている。勝手に判断してもらっては困る。観光局の女は言いたいだけ言ってしまうと踵を返して輪に吸い込まれるように戻っていった。

二人のモアイが力を入れた。僕は後ろに引っ張られた。モアイ達は僕を抱え上げて、冷たい台座に投げ下ろした。腰が固い鉱物にあたって痛みが走る。台座は大理石のデスクのようだ。モアイは恐ろしい力で僕の両手と両足をロープで縛った。大理石のひんやりした硬質感が背中をうつ。大きな空だ。ここは丘のてっぺんなのだろう。あの凶凶しい月さえなければいいのに。突然、涙がでてきた。空が曇る。星か涙の水滴かわからない。無言の輪は狭まってきて、息遣いが聞こえるくらいまで近くに寄ってきた。人々はそれぞれ何かつぶやいている。祈りの言葉のようだ。「太陽がまた昇るように」とか「神の思し召しの通りに」とか言っている。どうやら僕は人身御供に供されるらしい。

「お前は幸運だ」僕を覗き込む顔。バスに乗っていたじいさんだ。



「神の手にかかることができるのだからな」

「僕は死にたくない」

じいさんは哀れむように僕をみつめる。

「お前はもう死んでいるだろう。死人に死の甘露は味わえないものだよ。」

「冗談じゃない。僕は生きてるじゃないか。死人がどうしてしゃべれる？」

じいさんは不思議そうな顔をした。

「肉声と電子音は違う。それくらいわかるだろう。お前達のしゃべる音はただのアラームさ。無意味な数字の羅列でしかない。何も書かれてもいないし、何の象徴もない。」

「まあいいよ。僕の脳味噌は腐っていて死んでいるとしよう。でもこの肉体はどうなる。痛みもかゆみも感じるこの肉体が生きていないことはないだろう？」

じいさんは本当に困ったような顔つきをした。

「一年間に3000個のチーズバーガーを消費するような肉体を有しているとそれが生きていると思うのも無理はない。欲情と肉体の感覚は麻薬中毒者のみる幻影のようなものだ。インドの哲学者がおもしろいことを言っている。多くの人間は火事になっている家の中で無邪気に遊ぶ子供のようなものだ。外側を知ることなければ、危機を感じることもできない。」

じいさんはウィンクをして立ち去った。

しばらくして人々の輪はゆっくりまわり始めた。あいかわらず祈りの言葉をつぶやいている。星が一つ流れた。これだけたくさんの美しい星の光があるのに、あの月で台無しだ。しかし、やがて昇る太陽が奇麗な星屑も凶悪な月も全て焼き尽くしてしまうだろう。

輪の動きが止まった。観光局の女が輪の中から出てきた。右手に屠殺用の大きな山刀をさげている。一瞬人工的な香水の匂いが鼻をうった。僕は無意識のうちに大声で叫んだ。

「こいつはインチキだ。まがいものだ。こいつでは太陽を呼べない。」

輪が少しざわめく。女はいまいましげに山刀を振り回した。冷酷な脚がパンフレットをとりに行くような足取りで近づいてくる。やがて脚は動くのをやめ筋肉が緊張した。筋張った脚がやせた山猫の脚を思い起こさせた。口の中にニガウリを嚙んだ時のような鋭い苦味が走った。瞬間、胸に鈍く重い衝撃がおちた。下半身がもげたような感覚がして、僕は底無しの闇に吸い込まれていった。

## 5章 向こう側から

ところどころ打ち破れた粗末な小屋の中で横になっている。木の板が身体に直接あたっているのに、痛くない。身体が軽いのだろう。誰かがいる。薄暗い闇の中を見回すと後方に椅子があり、男の子とも女の子とも判別できない子供が座っている。ぼさぼさの黒い髪。黒い石のように無表情な瞳。

「やあ」

子供は殆ど唇を動かさずにあいさつをした。どこかで聴いたことのある声音。低く透明な底のしれない闇のような深い声。僕に不安を与えていたあの声だ。

「良く寝るね。」

「僕はこれでもずっと不眠症なんだけど」

と言おうとして口が動かないことに気づいた。なんてこった。しゃべれない。

「しゃべれなくてもいいじゃないか」子供が答える。

「空気を震動させなくちゃわからないなんておかしいね。全く。4の圏の住人の考えることはわからないね。」

4の圏？

「ま、僕らはそう呼んでるけど。その方がお前にもよくわかるだろうし」

??

「ダンテだよ。奴が言い始めた呼び方だろ。お前らの世界では有名じゃないのかい。」

聞いたことがある。神曲地獄篇の4の圏。どんなだったっけ。

「奴もいい加減なことを書いてるが、まあいいセンってるよ。お前の住んでた世界を象徴してるね。世界の住人が皆永遠に頂上に辿り着けない山を巨岩を背負って登っている所さ。頂上が近づくと必ずふもとまで転げ落ちるんだ。」

なんだかよくわからない。そんな意味がないじゃないか。

「意味なんてないさ。どこの世界にもね。退屈はあるけど。僕は4の圏は悪くないと思うよ。良い運動になるし。」

天国はどうなんだろう。確かダンテはいくつも天国を描いていたように思う。

「つまんないよ。火星天なんてちょっとおもしろいけど。本物の格闘家や剣士が集まっていて、おもしろい話を聞けるんだ。時々迫力のある殺し合いをするし。まあでも僕は4の圏を出てまだ日が浅いからね。どうしてもあそこに近いところに惹かれるんだ。大体物質はみんなそうだけど、安定な方向に向かって遷移していくのさ。魂も同じだね。猛烈な恋愛をしたものは2の圏で嵐に吹かれながら愛を確かめ合っている。命を捨てて大義に殉じたものは7の圏で大義が成就した後の行く末

を見守っている。」

子供は少し考えるように首をひねった。

「しかし生涯にわたって何者にもなれなかったものは、ちょっと可哀相だね。地獄門のあたりにたまってるけど退屈だと思うよ。なぜか最近が多いね。地獄門に来る奴ら。」

僕は突然、夢に見た長い満員の貨物列車を思い出した。汗だくになりながら満足げな表情をしていた人間達。あれは地獄門行きの貨物列車だったのだろうか。

「そうだね。長い道程だよ。地獄門までは。かれらはああやって時間を消費するのさ。窓のない貨車に乗っていることにも気づいていない。」

僕はにわかに混乱してきた。ここは一体どこなんだろう。僕はどこに向かっているのだろうか。

「ここは4の圏の外側だよ。お前はまた4の圏に戻るだろうね。でもその前にじいさんから頼まれたことがあってね。見て欲しいものがあるんだ。やけにじいさん、お前を気に入ったみたいだね。お前みたいな奴はふつう見れないよ。これは。」

「お前の世界でこれを見たのは1899年のイギリス人ウェルズ、1941年のアルゼンチン人ダネリとボルヘスのしめて3人しかない。」

子供はポケットから何か光り輝く球体を取り出した。

「あらゆる謎の中心、あらゆる球体の中心、底無しの間を中心がこれさ。」

球体には周縁がなかった。ぼんわりと曇った球体の中は無数にカットされた多角形の鏡面がぐるぐる回転している。しかもそのそれぞれの鏡面にはめくるめく光景が映し出されており、凄いいスピードで変化していた。ここまでの映像ならハイテク

AV機器の技術では将来あるいは可能かもしれない。驚嘆すべきことにこれらの無数の映像はただの映像ではなく、それぞれの世界のヌメヌメした内臓だった。つまり、匂い、色、音、熱、郷愁、官能や記憶まで全ての感覚が完全に調和した形でそれぞれの鏡面に宿っていた。これは世界史の缶詰だ！

子供が無表情に答えた。

「世界史のごく一部だよ。お前の星が知ってる世界は全て入っているが、それ以外の世界は見れない。」

「まあ、じっくり見てご覧。おもしろいよ。」

僕はその世界の謎が宿っている球体に顔を近づけた。僕は気を失った。

1943年年始、スターリングラード郊外。

残酷なまでに美しい凍てついた紺碧の空。寒い。大地の表面は堅固なとげとげしい氷で覆われている。ドイツ兵が凍えた身体を塹壕の底に横たえている。氷が薄い軍服に浸透し体温の下がった身体を冷やす。仲間の兵士はみんなもう南に撤退している。僕は助からない。このロシアの大地で固まってゆくのだ。フランツ、フランツ ヘルマー。僕はどんな風に見えるのだろう。みすばらしいねずみ色の（もう氷があちこちで固まっている透明の衣だが）軍服をきて泥と氷にまみれた大地にころがる肉の塊。僕はこのロシアの大地の肥やしになろう。赤軍兵をもう一人撃つよりは生産的だ。感覚が薄い。チーズの溶けたあったかいスープが飲みたいな。ムタ（母）の作ったスープをもう一度飲みたいな。

開け放した窓からよく手入れされた芝生の庭が見え、ライカ犬が寝そべっている。白いテーブルクロスの上を秋の透明で清らかな風がサッと吹き流れる。夕陽がマイゼンの白い陶器を黄色く染めている。（父さんが旅行に行ったときに買ってきてくれた美しい器）ムタが湯気の立つ鍋を抱えて台所から入ってくる。モツアレラチーズの芳醇な香りが漂ってくる。

無慈悲な凍てついた紺碧の空を見るフランツの目は涙で曇った。

僕は本当に自分があたたかいスープになって、フランツに食べてもらいたいと思う。僕は泣いた。そして気を失った。

230年秋、中国大陸北辺の村。

遠くで砂嵐が黄色い砂を巻き上げている。木片や動物性脂肪の焼けこげた匂いが空気中に漂っている。無残に破壊された小屋。わらぶきの小屋は焼けこげてみる影もない。石造りの家は内側から焼かれている。灰色の煙の中に固まった血が付着した布の切れ端が風にまわっている。奴らが来るのはわかってたんだ。こうなるのはわかってたんだ。奴等は今ごろ別の村を襲っているだろう。ああ腹が痛い。俺は右手に折れた槍を持ってうつ伏せに倒れている。どろどろした血が胸をぬらす。シャオはユンから2メートルほど離れた黄色い大地に小さな身体を丸めている。その小さな腹は馬のひずめに蹴られ、無残につぶれている。既に乾燥した腸が白い肌にちぎれたツタのようにはりついている。何もできなかった父さんをうらんでるだろう。俺はどうすることもできなかった。

意識が薄れてくる。

ユンと褥をともしたのが昨日のように思い出される。薄暗いテントの中。遠くの草原で馬がびっくりしたような鳴き声を上げたとき、俺は彼女に触れた。完璧な密度と重量をもった肉体。暖かい肌。優しい言葉。溶ける時間。俺は土埃の中で賊の槍が彼女の脇腹を貫くのを見ているしかなかった。彼女は死んでしまっただろう。いや、ひょっとしたら彼女は生きていたかもしれない。あれだけ完璧な肉体がみすばらしい槍一本でただの肉塊になるとは思えない。そうだ、死んではいない。傷だって一個所だけじゃないか。ああ もうだめだ。自分の身体が冷たくなるのがわかる。彼女はやっぱり死んでいるのか。ああ 彼女が見える。笑っている。思った通りだ。死ぬなんてことはない。そんなことは。

子供の低い声。

「暖かいスープと中国女のとりあわせは悪くないね。」

僕は涙に曇る目で子供の黒い瞳をみつめた。

「どうしてこんなに悲しいところばかりに行くんだろう。」

「完全に調和している世界（4の圏）では死が最も永遠の一瞬に近いからだろうね。僕らは今永遠と4の圏のある瞬間が交接するポイントにいるんだ。人によっては生きていうちに永遠を知ることがある。例えばランボウは地中海に沈みゆく太陽を見たとき、永遠を知った。西行は吉野の桜吹雪の中に永遠を見た。まあ例外だがね。」

子供は輝く球体をポケットにしまった。

「そろそろお前は帰るべきだね。」

## 6章 帰還

焼いた鶏肉の香ばしい匂い。僕はパイプベッドに横になっている。夕陽がまぶしい。黄金色に照らされた洗面器と聖フランチェスコの横顔。僕は立ち上がりベランダに出た。さわやかな乾いた夕刻の風が顔をうつ。パナマ帽の男達がたむろしている。チャールズ ブロンソンに似た男がにっと笑うのが見えた。眠りに落ちてからほとんど時間がたっていないようだった。洗面器に水をはって、頭をつけた。冷気が脳を引き締める。僕は旅行が終わったことに気づいた。日本に帰ろう。

テレビでは天気予報、肌のつるりとした男女のでているドラマ、混乱した愛欲のゆくえを語る芸能ニュース番組、外国のテレビ局制作のドキュメンタリー。猫のような顔をした西洋人の女が何か説明している。背景はうっそうと繁った熱帯の森。猫女が村の長老にインタビューする。しわだらけの顔。うもれた目。薄い唇。まただ。またあのじいさんだ。

僕はテレビを消して外に出た。

ガンガン シャンシャン。音が脳味噌をゆさぶる。ガンガン シャンシャン。太陽が白く輝いている。白い光のもとにはスーパーの看板、熱をもってほてったアスファルト、うち捨てられたような不法駐車の自家用車。ここが僕の住む世界だ。ガンガン シャンシャン。耳から太陽が無遠慮に侵入してくる。

ふと目を転じるとユリノキの根元に人が並んでいる。

薄い光に照らされて無表情に突っ立っている人達。

皺だらけのじいさん、ポブ マーレーのTシャツを着た大男、観光局の事務員、黒い石のような瞳のぼさぼさ頭の子供、猫顔の白人女。

彼らの額には一様に白い光が宿っていた。輝ける太陽の刻印が。

終わり

## 学生文芸コンクール 評論部門最優秀賞

### 指定課題 『魅力ある大学とは』

国際関係学部 4年 平井雅康

「良い大学の条件」といわれて頭に浮かぶことは、「魅力がある大学」であるということだ。何をもち「魅力」と考えるかは人によって千差万別で、学問の深さを挙げる人もいれば、講堂や図書館などの施設が多いこと、就職に対するサポートがしっかりしているなどを挙げる人もいるであろう。障害者の方にとっては、援助サービスが充実した大学であることが「魅力」になる。

このように、各人にとってさまざまに異なる「魅力」を全部満足させることは不可能である。就職活動ばかりにサポートしようとするれば、学問的な追究が制限される。大学施設にしても、文系向けの施設と理系向けの施設では構造や規模、施設完成後の運営などもまったく異なってきてしまう。そこで、私が考える「魅力のある大学の要件」は、そのような別々の欲求への対応が適切になされることである。すべての欲求に完全に対応するのが不可能である以上、それらに優先順位を付けるのは当然であるが、その際に学生や大学関係者または第三者である地域住民が意見を表明する機会が確保されていて、かつ、判断のプロセスが透明だということである。

以上のように、私は、魅力ある大学をつくるに

は、大学における行政機関の役割が大変重要になるのではないかと思います。

次に、では実際にどのようにすれば「魅力ある大学」になれるのかについて考えて見たいと思います。

私は、やはり大学は、学問を追究する場であると考えています。そのため、「なぜ大学で学ぶのか」や「大学で何を学びたいのか」それを明確にしうる学生の発掘に大学側が真剣になるばかりでなく、学生に対して大学の学問に対するビジョンを伝えていくことも重要なのではないかと私は考えます。

それゆえに、私は次の3点から「魅力ある大学」について考えたいと思います。

#### 1. 知の共有を広げる

「知は力である」と16世紀の哲学者、F・ベーコンは語ったが、私はこの言葉の意味をもう一度見直すべきであると考えます。

「役に立つ知識」「力になる知識」とは、どれほど深く広がりをもったものなのだろうか。「今」「目の前のこと」に役立つものが、長い一生の中で大切なものを失わせてしまっているのかもしれない。今、目の前のことに一見邪魔に感じられるも

のが、見えないところで栄養分になって自分を育て、無限の可能性を広げてくれるかもしれないのである。

「魅力ある大学」にするためには、実学だけでなく純粹に知的探求を試みる学問を提供することが第一歩になるのではないかと思います。また、理系や文系といった枠にとらわれず、むしろ知の共有をすることで学際的な視点を養えると思います。

## 2. 民間やNPO、地域とのつながり。

「魅力ある大学」にするために、私は、大学当局だけの役割だけでは不十分だと思います。従って、民間やNPOが活動しやすい、できる環境であることも重要であろう。例えば、大学の授業の一環として、インターンシップ制度やフィールド・ワークに利用することが出来るのではないかと思います。また、私が思うに、民間の人達を大学に講師という形で多く取り入れ、その経験を生かして教壇に立ってもらえれば、学生達にとってもより身近で親しみやすい講義が展開され、大学の魅力の一つになるのではないのでしょうか。

## 3. 研究者と教育者の分離

私は、大学の最大の魅力は、学問を追究すること、それはすなわち、自分自身が社会の中でどのような位置を占め、いかなる意味を持っているのかを見つめる作業ができる時間が多くあることだと思います。

しかし、大学の教授の大半は、教育者と研究者という2つの役割を果たさなければなりません。そこで、わたしは、先生方にも自分が教育者なのか研究者なのかを考えてほしいと思います。どちらか一方に専念することで、より知的好奇心を持って学問のあり方を考えていけるとと思います。

また、学生側も通常の授業は、教育者の先生方から指導を受け、ゼミや院レベルといった高度な学問領域を学ぶ上で、研究者の先生方から指導を受けられれば、より専門的で細分化された学問を追究していけるのではないかと私は考えます。

## 4. ITの積極的活用

情報技術を効果的に利用することによって、より分かりやすく親しみのもてる講義がなされること、将来的に向けたビジョンを示すことなどが達成できるのではないかと私は思います。

しかし、その中でも情報技術を一番利用できるものとしては、大学を通信の発信ベースにすることができるとだと思います。これまで、アタックできなかった相手にも目を向けることができ、新たなチャンネルの創造を産み出すことができます。また、「知の共有」という点で、情報技術の波及性は高いと言えます。インターネット上で、「知の共有」することは、大学の存在価値を高めるとともに魅力作りとしても大いに効果があると言えます。

結論として、私は、上記の4点に取り組むことで、より「魅力ある大学」になれるのではないかと思います。

大学当局は、全ての人の欲求に応えるのではなくその欲求に対して適切な優先順位をつけるべきだと思います。そして、知の共有と民間やNPOが活動しやすくする環境であることも重要である。付け加えて、情報技術を駆使して、新たなチャンネルを産み出すとともに各大学間、民間との交流などをしていくべきである。

以上の4点が相乗効果をあげることが仮にあったならば、その大学は、「魅力」という点では、他にまさるものはないと思います。

## 第3回学生スピーチコンテスト開催

はばたき寄金では、日本人学生の日頃の英語学習の成果を試す場所として英語によるスピーチコンテストを、外国人留学生の更なる日本語の上達を願って、日本語によるスピーチコンテストを開催した。

11月3日に開催されたコンテストでは、「21世紀の日本の役割」を共通テーマに英語、日本語によりスピーチが行われた。審査の結果次のとおり入賞者が決定した。

部 門	賞 区 分	氏 名	所 属
英 語 の 部	最優秀賞	近藤 隆子	国際関係学部4年
	優 秀 賞	酒井 美穂	国際関係学部2年
		原野 祐輔	国際関係学部3年
	入 選	山村 和也	国際関係学部2年
		藤原 洋子	国際関係学部3年
日 本 語 の 部	優 秀 賞	王 恵英	国際関係学部3年
		廬 少波	生活健康科学研究科博士前期課程1年
		李 婧	経営情報学部3年
	入 選	湯 薇薇	国際関係学研究科研究生
		王 超群	経営情報学部1年



## はばたき賞表彰式

はばたき寄金では、本学教員の推薦により、他の学生の模範となる学生に対して、「はばたき賞」を授与している。今回、次の3名を表彰した。

国際関係学部4年の森田太郎さんは、ボスニアの民族紛争の解決のために積極的な行動をとり、ユーラシア地域の紛争解決への貢献を志す若者に贈られる第1回秋野豊賞を受賞。

大学院薬学研究科博士後期課程2年の浅井知浩さんは、第7回国際リポソーム会議において「腫瘍新生血管を標的としたリポソーム」の発表でポスター優秀賞受賞。

大学院薬学研究科博士後期課程3年の外角直樹さんは、第6回国際微量元素学会においてマンガンの脳機能に対する作用について発表。研究成果は国際神経科学雑誌に掲載される予定。

森田さんはNGO活動のためサラエヴォへ出発するため、一足先に9月29日学長室で表彰状が授与され、浅井さん、外角さんに対しては剣祭初日の11月3日、学生文芸コンクール会場で表彰式が行われた。



国際関係学部の森田さんへの表彰状授与



薬学研究科の浅井さん受賞スピーチ



薬学研究科の外角さん受賞スピーチ



## 国際関係学部の動き

国際関係学部長 関森勝夫

学生数は9月1日現在838名、内訳は国際関係学科290名(男子118名、女子172名)、国際言語文化学科548名(男子124名、女子424名)。

新任教員仁科 明講師  
(6月1日着任)、福永有

夏講師(9月1日着任)。

平成11年度卒業生170名のうち、就職決定者109名、就職率94.8%。厳しい状況にあって高い就職率を上げることが出来たのは、学生諸君の4年間に亘る研鑽の成果であることは勿論であるが、教職員一同の日頃の支援助と県下企業のご理解あつてのことと感謝している。

### I 4月よりの動きを次に紹介する。

#### 留学生アドバイザーの新設

本学部の留学生は39名が在籍している。教育面、生活面等留学生対応は国立大学の環境と比べると10年以上遅れているといっても過言ではない。少しずつでも環境を整えたいと、先ず5名の教員を任命、教育、生活のみならず日常の万相談に当たってもらうことになった。

#### 視覚障害(全盲)の男子学生の入学

大湖田裕君(言語文化学科)が入学。初めての受け入れで諸事不安があつたが、事務局の格別の配慮を得て、教育機器の完備、教育面でのサポート等最良の体制を整えることができた。外部のボランティア団体が教科書からビデオ画面解説までを支援下さっている。(東京都視覚障害者総合支援センター、アイボランティアネットワーク静岡等)

又奨学金を富士銀行、静岡新聞社SBS静岡放送からいただいている。更に体育授業時、情報機

器操作補助など学内の学生支援も大きい。大湖田君のアドバイザーとして2名の教員をお願いした。快適な学生生活が送れるよう今後とも見守っていききたい。こうした教育環境を整えるためには事務局のご理解があつたことを特記しておく。

#### 「海外研修英語」の科目新設

長年懸案となつていた海外語学研修の単位を今年度より認定することとなった。「海外研修英語」の授業科目を設定し、2単位～6単位までを認定する。その効果が今夏のニューキャッスル大学に於ける夏期語学研修参加29名に表れた。

#### 教職免許の改正

教職免許法の改正を受けて諸般の事情考慮の結果、今年度より高等学校専修免許(英語・国語)のみの取得可能に改めた。したがって中学校免許は出せないこととなる。

#### 留学生のための「基礎英語」の補習

アジア系の留学生(特に中国人)は英語力の不足が指摘されて来たので、今年度特別に補習授業を開設した。非常勤講師に依頼15回30時間を7月より9月まで開講した。好評で次年度も続けて欲しいとの要望があつた。

### II その他

外部評価の問題がこのところ話題になることが多い。一つのバロメーターに科研費採択率が使えよう。本学部としては、学内で平成8年58.8%11年83.3%、12年55.6%で1位、9年、10年は2位の位置を占めている。補助金も個人で600万円、800万円、1000万円との高額を得ている教員が4～5名居る。広く国内外に出て資料収集や学会活動をしなければ研究成果が上がらない分野が多く、とかく留守勝ちになることで批判的ともなるが、それだけの活動をしていることもご理解いただきたい。今後とも若い研究者が積極的に応募

し、研究業績を重ね本学部のみならず県立大の名を高からしめることを期待している。

課題としては、まだ同窓会組織を持っていないので、15周年記念大会までに同窓会を立ち上げたい。

少子化、独立法人化を視野に入れた本学部の将来像を画定しなければならない。学部構成員の本学部活性化への意欲が大いに期待されるところである。

## 看護学部の最近の動き

看護学部長 矢野正子

看護学部は学部創立から4年目となり、今年で全学年がそろい、新世紀元年の3月には第1期生が社会で活動を始めます。

平成12年10月1日現在の学生数は、4学年合わせて236名、これ以外に3名が休学中、3名が退学しました。

今まで4年の間、カリキュラムはうまく展開するのか、臨地実習体制はうまく組めるのかなど、教員は新しい職場で新しい体験をしながら仕事をこなしてきたわけですが、この時期になりますと、改善すべき課題、新たに組み込まなければならないことなどが山積みになってまいります。4年間にコツコツであっても続けてきてよかったこと、反省すべきことなどが、当然ながら見えてまいります。

そこで今回は、目の前にある4つの課題について前向き志向の解説をしたいと思います。

### 1 社会人・編入学試験の実施

去る9月30日(土)に社会人・編入学試験を実施しました。

平成4年以来、全国で看護系大学が急増し、現在もその数は増えつつありますが、その間に大学改革が叫ばれ、生涯学習の推進、入学資格を含む

規制緩和が行われるようになりました。昭和60年頃には、大学が学校教育法の第1条校でない専修学校の卒業生を編入学の対象とするなどということは全くあり得ないことでした。このことで、私は当時厚生省にいましたが、何度、文部省に申し入れをしたことが。しかし、答えはいつもNOでした。厚生省所管の専修学校のステータスを上げるには、このしくみを作ることがまず第一の突破口でありましたから、それが今、時代の波に乗っていても簡単に、しかも当学部でそれを実施することになったことは、当たり前といえば当たり前で片付けられますが、世の中は変わった、の実感です。

### 2 大学院看護学研究科の開設準備

次の課題は大学院の開設です。

戦後、看護の大学教育のスタートは昭和27年に高知女子大学家政学部看護学科が第1号であり、続いて昭和28年東京大学医学部衛生看護学科が設置され、その後は平成3年までわずか11校に留まっていたましたが、以後急増しています。それまで看護職を志す人々には、上級の教育機関へ進学する道が閉ざされていました。ましてや大学院についてはさらに遅れをとりました。

そこで、当学部においては、今後の社会保障制度の動きや、保健・医療・福祉サービスの供給システム統合化の方向などをふまえて、看護職の役割や機能を重視し、それに対応していくには看護領域の実践と教育ならびに研究など、あらゆる領

域で高度な職能化や専門化は欠かせない条件となるだろうと考え、現行の学部教育を基盤とし、また、学内他研究科との協力・連携を得て大学院教育を整備することにしました。

現在、文部省に設置許可申請中ではありますが、将来広く静岡県下の看護関係職種のリーダーとして活躍する人材の誕生を期待します。

### 3 教育課程の改正

看護系大学は、大学教育としての内容とともに国家資格である保健婦・士、助産婦、看護婦・士の養成機関として指定を受けることから、その教育内容は社会の要請や動向によって強く影響を受け、指定基準が変更されます。このことが4年の間に生じたため、それ以前の基準で作られた学部のカリキュラムをこの際見直すことにしました。

現在、改正作業はほぼ終盤となり、来年4月入学の1年生からの適用に備えています。平成9年改訂の新指定規則では、在宅や地域ケアへのシフトが見られ、これも時代の流れを反映しています。

### 4 地域住民を対象としたプロジェクト

ここで目を転じて教員の動きの一部を紹介します。

静岡県は、高齢者の平均自立期間は沖縄県に次ぐ高い位置にあります。そこで、静岡市を手始めに、静岡市内の比較的中心部に近い地区、山間部であるがその中間にある地区について、老人大学

や寿大学に通う元気な高齢者のためのセミナーを企画しました。

これに参加されたのは、2年前からライフスタイルの面接調査に応じていただいた方々が含まれています。今回のセミナーの目玉は、調査結果に基づくグループ討論でした。その他、大学の教員が「みんなの体操」や「イズノスケ音頭」のインストラクターとなり熱演したところ、今後の集まりで正式科目としたいといわれ、参加者の積極性にびっくりしました。

大学が地域社会に果たす役割を探るために、静岡市民の健康の秘訣の一端を解き明かそうとするのが、本プロジェクトのねらいです。

今回は学生の動きは略となりましたが、あしからずご了承ください。

(静岡市内での高齢者セミナー)



# 大学院生の研究が研究助成に採択

財団法人 浜松科学技術研究振興会

平成12年度科学技術奨励助成 平成12年9月5日決定

「ディーゼル排気微粒子(DPE)による肺での炎症発症機構の解明」

生活健康科学研究科環境物質科学専攻 博士課程3年 伊藤智彦(生態機能学研究室)

浜松科学技術研究振興会では、大学等における研究者の育成と研究環境の一層の充実を図ることを目的として研究助成を行っている。今回の研究助成は、静岡県内における大学等の機関における博士後期課程で研究を行っている大学院生を対象にしたもので、年間12件の研究テーマが採択されている。

財団法人 静岡県茶業会議所

平成12年度 茶学術研究助成 平成12年8月21日決定

「茶カテキンの脳卒中予防効果」

生活健康科学研究科環境物質科学専攻 博士課程3年 田淵正樹(生態機能学研究室)

静岡県茶業会議所では、茶の科学、保健効果等を明らかにし、国民の健康増進、茶産業の振興に寄与するため、茶学術研究に対し助成を行っている。国内外の研究者、大学院生、研修者が行う茶の科学並びに保健効果に関する研究が対象となり、年間5課題を限度として採択されている。田淵さんは本助成について、大学院生としてはじめて採択された。

## 人事

### 採用

9月1日付け

福永 有夏

国際関係学部国際関係学科講師

齊藤 麻子

看護学部助手

10月1日付け

川瀬 光義

経営情報学部教授

加藤 大

薬学部講師(薬品分析学教室)

## 受賞

## 第12回環境システム計測制御学会 奨励論文賞

- 論文題名** 「実下水を対象としたパイロット規模での活性汚泥法ファジィ自動制御システムの検証実験」  
**執筆者** 環境科学研究所 助教授 岩堀恵祐他3名；学外者  
**受賞理由** 家電、メカトロ分野で盛んに実用化されているファジィ制御は、環境関連プラントでも応答速度の比較的早い燃焼系プラントに適用され実績を積みつつあるが、活性汚泥下水処理のように流れ系や微生物反応系の挙動が複雑で応答が遅く、不確かさの大きいプラントの自動制御への応用は少ない。本論文は手順のしっかりした実験により、ファジィ制御の実用性を検証したもので、充実した内容となっている。さらにファジィ状態診断をも結合させるなど実用化を期待させる内容となっており、優れた論文である。しかし、下水処理効率が流れ系や微生物活性に依存する点から言えば、パイロットプラント規模での実験結果から直接的に効用を言いがたい面をもつ。制御効果が従来の汚泥負荷などの諸条件に照らして顕著なのか、また従来型制御に比してファジィ制御の効用がどこにみられたのかの考察をさらに期待する意味で、奨励論文とする。

### 研究助成の採択

- 日本学術振興会 平成13年度NIS（旧ソ連）諸国研究者交流事業派遣研究者内定  
ロシア 平成13年5月15日～6月16日（30日間）  
薬学部 微生物学教室 増澤俊幸
- 平成12年度 財団法人 興和生命科学振興財団研究助成  
阿部 郁朗 静岡県立大学薬学部生薬学教室  
「植物ポリフェノールをリードとする新規コレステロール生合成阻害剤の開発」
- 昭和シェル石油環境研究助成財団 2000年度環境研究助成金  
「大気汚染物質の光毒性に関する研究 多環芳香族炭化水素とUVAとの複合作用によるアポトーシス誘導とその機構」  
環境科学研究所 光環境生命科学研究室 助手 伊吹裕子

## 平沢入り口の『左口の神』

県立大学・県立美術館・県立中央図書館前という静鉄電車站を降りて、北の県立大学にむかう道をはる、この道は近年ケヤキ並木が素晴らしい。信号二つ目の右がわに神社と『静岡市谷田公民館』がある。この公民館のうしろ（南がわ）に、小さい小川が流れている。そばには『会計事務所』があるが、この小川のほとりにあるのが、『左口神』である。小さな石のホコラがある。『しゃくちのかみ』と読むのだが、その由来は不明のまま、古来開拓の神といわれてきた。信州諏訪地方を中心として、分布している。

研究した論文も殆どなく、民俗学・宗教学からも忘れられているのだが、これまでの調査から、相当古い神さまであることがわかった。

<左口は赤蛇（しゃぐち）>

簡単にいうと、『蛇を祭る神』ということで、縄文時代につながるものだという事である。

『しゃぐち』とは、赤（しゃく）蛇（ち）という意味なのである。赤をしゃくというのは、赤銅と書いて『しゃくどう』と読む例もある。ちが蛇なのは、

## 谷田風土記

『おろち・みずち』である。

赤い蛇が神になるのは、マムシであり、古代人は、この毒蛇を恐れた。神として崇めたのである。赤はまた太陽の色でもある。

蛇を頭に載せたり、蛇の顔をした女性の土偶が出土するのも、このあたりを示す。蛇は神であり、現在も諏訪上社の『御室神事』は、蛇である神を静める行事として有名である。県内各地から蛇の顔をした土偶が出てくるのもこのあたりをうかがわせる。

縄文時代の神である『左口の神』は、開拓と蛇よけの神でもあったわけで、この谷田の左口神のあるところは、いまでも蛇が出るという。水の近くに蛇がいるのは、当然であろう。

いずれにしても縄文時代の神が県立大学のそばにまつられているのは、興味深いことである。

66 (国際関係学部教授

・高木 桂蔵)



蛇の顔をした縄文土器（県内裾野市出土）

## 黒田行昭国立遺伝学研究所名誉教授に客員教授称号附与

本学は、7月評議会において、黒田行昭国立遺伝学研究所名誉教授に対し、客員教授の称号を附与することを承認した。

黒田行昭理学博士は、静岡県立大学生生活健康科学研究科の加治和彦教授（老化制御研究室）と本学において、共同研究を行う。

黒田行昭理学博士は、大阪大学助教授、国立遺伝学研究所室長、同部長、麻布大学生物科学総合研究所長を経て、平成9年静岡県立大学生生活健康科学研究科客員共同研究員（老化制御研究所所属）となり現在に至っている。

学会活動においても日本遺伝学会、日本発生生物学会、日本組織培養学会、等の役員を歴任している。平成10年には日本環境変異原学会の学会賞（平成10年）を受けている。

黒田博士は細胞学と遺伝学を両輪とし、組織培養技術を縦横に使いこなして、一貫して生命現象

の探求にあたってきた。研究の初期においては、シカゴ大学のモスコーナ教授とともに細胞間の接着の問題を研究、その概念と研究技法をいち早く日本に導入した。現在は緑茶カテキンの抗変異原作用を中心に精力的に研究している。

名誉教授称号の附与は平成12年10月1日から平成16年3月31日までの期間。10月2日に称号附与式が行われた。



学長室での称号附与式

## パラリンピック出場の稲葉さん県立大学で壮行練習

シドニーパラリンピックに視覚障害者柔道で出場した稲葉統也さんが、出発前の10月5日、県立大学柔道場で壮行練習を行った。

柔道部の練習には、部員である視覚障害学生の大胡田さんも参加。柔道部長の薬学部武田講師も参加して、本学関係者が見守る中、準備運動から組み練習までを行った。

視覚障害者柔道の場合は、お互いに組んでから試合を開始し、技を掛け合う形で行われる。稲葉さんと練習で組んだ大胡田さんは、視覚障害者柔道の実践的練習が出来たことを感謝し、パラリンピックでの健闘を祈りますと語っていた。

シドニーパラリンピックで、稲葉さんは視覚障害者柔道90キロに出場、3位決定戦で韓国の選手に敗れ、惜しくもメダルを逃した。



本学柔道場での練習

## フィリピン大学短期交換留学生来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるフィリピン大学から、短期交換学生交流事業による派遣学生が、10月初旬来日した。

フィリピン大学 経済学部経営経済学専攻4年生のジョイ・ブレッシルダ・シネイさん（Joy Blessilda F Sinay）は、国際関係学部で日本語や日本文化、日本文学について授業を聴講する。

平成12年3月末までの6ヶ月間、清水市内のホストファミリー宅に、ホームステイ。日本の家庭で生活しながら本学で勉強する。彼女の日本訪問は初めて。

短期交換留学制度による学生受け入れは今年度で4年目、短期交換留学を行っているモスクワ国立国際関係大学からの留学生を含め計8人の学生を受け入れている。



学長への表敬挨拶

